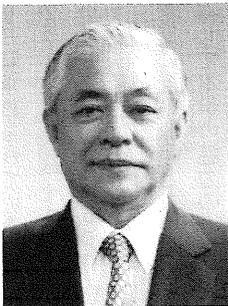


大学教育のあり方



西澤 潤一

(首都大学東京学長)

学校が出来たのは東洋が遙かに早く、孟子が学校の隣に住むようになって、勉強の真似事をするので母親が安心したという孟母三遷の教えは、西暦紀元前四世紀頃と考えられる。北イタリアのボローニャに於いて若者が寄り集まって、これからの発展に対応すべく識者の講義を聴きたいということになって、講師の選任から謝金まで決めたと伝えられているのが西暦一〇八八年のことである。これが一一五八年ボローニャ大学に発展し、欧州における大学の創始とされているから、大概一五〇〇年の差がある。それなのに日本の学生諸君で我々東洋の方が遙かに長い学校運営経験を持っていることを意識している人は殆ど居ないと云うのは全く不思議な話である。その上、教育と云うのは一種の複雑科学であって、不具合なところがあれば直し直しと今日に云っている筈なのであるから、経験の長さは重要であった。宗主は米国である、欧州である、と考えはじめたのは寧ろ近世のこと、宗主が決まると改良してゆこうとしなくなる。つまり宗主に預けて自主性を失うことになった米国占領以降であって、同じ非占領国でも民族性を主張

したドイツではこうはならなかったのである。此処に教育は知識の伝授ではなく、文化の伝承にあると考えて来た国々との間に大きなズレを持つことになってしまったのである。

昔の学校には卒業証書はなかったようで、講義を聴けばそれだけ能力が向上する筈であるから、それだけで十分学校へ通い授業料を払った価値はあると考えることができた。それが現代、卒業証書や認定などと云うことを考え出して事務を簡易化したつもりが、査定の手段方法が不適切或いは不正確であったから、逆用して能力の伸長に充分に効果を現していないのに卒業してしまったり、充分な学問のバックグラウンドを把握していない信頼に値しない人間が現れたりすることが多くなった。

これが特に大きな問題を生ずるに至っていることになる。その一つの原因が、教育の原点が本来持つている長所を伸ばし、その人間の特徴とする点を強調することによって、社会人として他人のすべてが出来るとは限らない特定の能力を持たせて社会に送り出してゆくことを目標にしていたものが、すべての卒業生に同じ能力を持たせると云うことになる。卒業させる生徒の数を物凄く絞らなければ不可能になると云うことが云えようし、また逆に大した能力もないところに目標を置くことになるから、学校としての意味を失ってしまうことになるのは至極当然と容易に類推することが出来る。

文化というものを一概に否定するのも異常であるが、逆にまたすべてを肯定して引きずって行こうと云うこともまた誤っている。然し、すべてを強くする文化を残すことに成功した国や民族が国際競争に勝ち残り、失敗したものが衰退すると云う極めてスケールの大きな淘汰が行なわれた結果として我々の国もあり民族もあった。近々数の激突における勝負を云々することは未だ甚だ試験数の少ない試験に類するもので、未だ安靜化の畢っていない衝突の結果を論ずるに似ている。これから安靜化してゆくための極僅かな時間に於いてさえ、ガラガラと突然の変化が誘発され負けてしまうこともある。今時バブル崩壊について云えば、戦後の全くの辛酸を嘗めた時も正に極限状態だったが、その後の夢のようなスームアップは、その原因もよく把握しないで便乗するかたちになってしまったために、大抵の人にとっては原因も分らぬままに正にバブルの崩壊を受けることになってしまった。

元を糾せば伝統を放棄して馴れない新しい経験に酔っていたが故に突如として崩れ出した修正も効かぬままに昨今の毎日自殺者の報ぜられない日はないという惨状になったのに、私達には何か再起の息吹も感じられぬ状態が続いている。いろいろの説もあるようだが、今再び基本に立ち戻って一歩から修正してゆく以外に道はなさそうに思われる。

戦後逸早く夢の学園として喧伝されたハーバード・ビジネススクールに若人を送って戻って来た卒業生を、今日の経済戦場に送り込むと、「こんな習わなかつた」と云うと云われた。即戦即決、何でも即時解決してくれると思われていたハーバード・ビジネススクールの卒業生もまた応用動作能力に欠けるようになって来た。つまり学問の一般形態として、絶えず一般化の性向を持ち、つまり学問に於ける哲学的要素と考えられているのだが、智慧の中にまじめ上げた基礎法則を温存していて、そのままのかたちで解を頭の中に保存していない時には、基礎法則に戻って、そこから具体的な解、つまり、具体的な対応を見出してゆくのが当然のやり方である。それなのに具体的な体験がそのままに止って、一般法則に纏め上げられていない場合には、丁度学習した問題に遭遇した時には明快な対応がとれても、一寸でも違っている場合には対応がでなくなってしまう。多くの法則に纏め上げられるべき宝の山と云える経験の巨大な蓄積は、宝になり切れずに面倒な間違い易い雑然たる山になってしまっている。本来は抽象的な一般法則を生む宝の山であり、具体化するときに多くの手段方法の例を示してくれる模範事例集だったのである。

斯くして、折角のビジネスに失敗したり、工業化に途を見出せなくなることになる。此処に近年の知識偏重教育は、普及範囲を拡げると共に思索による裏打ちが出来なくなつて嘗ての榮光を失いつつある。

此処で、一般化を中心に教育が行なわれ、基礎重視と一般法則中心の演繹教育は、発展創造に弱かつた反面、安定状態に強い特徴を持っていた。結局両つながらにして急激な変動に対応し切れず近年急速に力を失つた。

今やこの両つの学問の傾向から脱却して、両者を併せ持つかたちで一つの次元を超越した学問を研究して直ちに教育する必要性に迫られている。然し、すべての学生に両つの立場を修得させる教育を行なうことは殆ど不可能であるから、この両つの立場を教育に如何なる割合で取り入れるかが、先ず大学教育の方針を決める第一歩であろう。しかも具体的に教育を進めながら、かなり頻繁に相互関係を思い起こさせながら進めてゆかなければ両者を結び合わせる

と云う最も重要な思考をすら忘れるに至つて教育の効果が著しく低落してしまうことが層々である。自主的に両者の関係を否定して、関係を思い出すことすら汚らわしいとして、純粹な頭脳の思索に誇りを持つことを標榜してきた数学ですら、近年急速に現実との結びつきを意識しはじめている。元来旨く結びつけてゆくことによつて本来の創造まで誘発されて来た学問の本質とその事象を手解きするのが大学であるから、各大学毎にこの出発点を何処において教育を出発させているのが各大学の特徴の一つであると考えて宜しいのではないだろうか。

高校迄に、社会人として、マスターしておくべき演繹すべき基礎知識を一応マスターすることを中心に教育が行なわれて来た。それと共に人間と云うものが何を視点において一生を生きてゆくかの基本をも併せ教えられる。近年、近代化社会での常識は個人主義に殆ど纏まったのだが、未だ依然として宗教に凝り固まっているグループもあり、より人間的だった君主制が破れ去つた後にも自己矛盾を依然として解決することが出来ないグループも寡なくない。

このような混沌の時代に社会人として活動を迫られる学生諸君は如何にして指針を得ていったらよいか。筆者が尊敬している人の一人に後藤新平先生がおられる。世に伝えられるところでは、大風呂敷、甚だしきに至つては「単なる大風呂敷」と云うのまでであるが、全く見当外れでは大風呂敷とさえ云うわけにはゆかない。見通しの適正さ、先見力の豊かさがあつたことを見落としてはなるまい。現実を認識すると共に、その上に自分のロマンを画く。これこそ現代人に許された生き方ではないだろうか。

逆に云えば現在の大学生が大学時代に是非考えておくべきことは、如何なる夢をこの空し世に画いてゆくかと云うことであろう。ちゃんとした基礎学問を身につける最後の時間であるから、それだけでも結構忙しいのだが旧制高校式の間形成の時間をとれる筈は先ずないと云えるであろう。

何しろ、今は偏差値輪切り社会で、本当の能力を数値表現しようと偏差値なる方式が考えられたけれど、決して正確と云うわけにはゆかなかつた。それなのに日本人の智慧は、偏差値だけを上昇させる方法である。つまり叢書記、ひたすら暗記であつた。確かに偏差値は上昇したが、実力の方はその割合では上昇していない。本来的に云えば、実

力を上げることが目的なのだから、これでは目的を果したとは云えないのだが、日本独特の手法と考え方と云うのは一寸情けないことだが、本来の目的を外しても、見掛けだけを仕上げてしまう。日本の民族藝能や民藝品が泣くような現実になっていることを嘆かざるを得ない。ここに現代教育の誤りの一つがあった。現実には学校での評価法は偏差値になっており、対外的にも通用しているから学生諸君が、実力を上げる勉学をするより安直に偏差値が上がるような暗記勉強の類いをした方が有利になってくる。

このあたりに最近日本人は子供になったとか、人格・人生観がない、その場その場で局所的に変わるなどと云われることと繋がりがあがることは明白である。記憶するだけで、頭が思考していないから、知識がバラバラで互いに脈絡がとれておらず、甚だしいときは同じ設問に対し異なる解答が両つ入っていて、どちらの解答が出るかは全くお天気が次第であると言ふ。これがバラバラの知識だけでなく、その理窟であるとかその応用とかに結びつけてあれば、どちらか正しい方だけに残るのだが、結びついて智能になっていなければ、何時まで経っても修正が効かないことになる。このよく練れて繋がった智能を持った若人が寡なくなったと言ふことである。既成の智能の世界から未だ纏まっっていない未知の世界へ跳ね出す。これが創造であり、物理学史やその一端を知ることはいかに参考となる。

馬鹿に遠慮して、国内で日本人が拉致されても抗議も積極的に行ないもしないと云う対外弱腰を指摘され批判される反面、天皇の統帥権を侵して外国に攻め込み、国際平和を破壊した軍人まで祀られている神社に参詣しないのを批判したりすると云った矛盾した考え方を持って判断が分裂しているなどもその一つであろう。自主的であるためには無矛盾を要する。

自然科学では、この点が遥かに重くなつてどこかに矛盾があれば、これが時に致命的な失敗を誘発する。自然科学では、単純であることが特徴の一つであるから、このような記憶の不正確さは救いようがない。それだけに余り頭を使わなくても矛盾に気がついて修正されていることが多いようである。

だから、大学の学生ともなれば、教科書で提示されていることを記憶するに留まらず、いろいろな面から見て物を考えておく必要がある。筆者の体験によれば、このような読書が行なえたのは旧制高校で、その入学が最大の難關だ

つたのだが、これを一応超えた後は、殆どが自己の探究心の赴くままに読書したものである。つまり、主流をなす教科書的な骨格知識は一時棚上げにして、現実的体験や、それを補う文学小説などの類いの耽読に多くの時間を割くことになったのは現実社会での活動に一步近付いてゆく時期に甚だよく適合していたと云わざるを得まい。自己の抽象的感性のみをとり入れた智能で対応すると云うのもよくあるケースであるが、結局これで実社会に於いて充分な包括的な仕事にはなり得ないものと考ええる。特に二一世紀ともなれば、中世とは異なつて充分な拡がりを持つた対応や考えを持つた人間であることが要求されて来る。

この点について自然科学系でも全く同様なことがあると考えている。高校入学後も、理科学科の人間性のない教科内容に大きな不満を感じていたとき、アインシュタインとインフェルトの物理学は如何にして作られたかとか、ポアンカレ『科学と仮説』、ルイ・ドゥ・ブロイ『物質と波動』、ブリッジマン『現代物理学の論理』などが如何に物理をはじめとした理科学科の勉強を楽しくしてくれたことか。決め手は天野清の『量子力学史』などであった。これらは、その後の研究の進め方について極めて大きなバックボーンを与えてくれたものと考えている。最近のものでは、米澤富美子先生の『人物で語る物理入門』がある。

このような読書など夏季休暇などに纏めて行なうのがよく、文理を問わず、学者の伝記などは大いに効果がある。こんなところから、人間の仕事と云うものが単なる知のはたらきだけで決るものでないことが把握されることとなるのだが、燃え上がるような探究心とか人間社会に於ける行動の情熱を持つことが要求されて来る。これに対しては、いささか遅れ気味と云わざるを得ないのだが、私の場合には、梅原先生まで虚無主義哲学者と呼んでおられるキルケゴールやニーチェに熱い愛の哲学を読み取ることが出来、その『死に至る病』と『ツァラトゥストラは斯う語つた』『曙光』に大きな愛の哲学を見出して、人間としての一生の道しるべを得たような気持ちであった。

このような中から他人と競走しない自己活力と云うか努力目標の発見がある。実は私が今一番心に掛けているのはこのことである。子供に何か努力させようとしたら競走させるのが最も効果的であることは先ず間違いないことであろう。しかし、こんな競走を大人になつてからも必要とするのは、目標に選ばれた相手にとつては全く迷惑な話で

ある。帝国海軍が弱くなったのはハンモックナンバーなるものが尊重されるようになってからだと言われる。前述の如く、偏差値にせよ、知識の有無に関する知の採点は、余り個人の社会に対する貢献度とは関係が大きくないと云われている。別の言葉で云えば、知より情とそれらに基づく意であると云われており、東洋人は、寧ろ情と意に優れたものを持っていると云われている。

その点では、科学の世界は特に知のはたらきが大きい。この分野も東洋人は得手でないと考えられているが、その科学の分野でも、西洋には全くなかったと云つてもよい神話時代の中国に三皇五帝と云われる指導者が居て、三皇の一人神皇が植物を嘗めて有毒や薬物、食糧を分類して人民に知らしめ、五帝の一人伏羲は同様のことを畜産について実施したと纏められているが、一つの虚構であるとされることもあるが、こんな虚構を西暦紀元前四七五〜四〇五年に纏めたことこそ、今日最先端のバイオの考え方が存在したことに他ならない。だから、一概に西欧が、アジアがと云うことにはならず、アジアの科学も仲々の水準だった。

寧ろ、近年になって、そう云う考えが語られるようになった。その眞因は日本人の考え方に自主性が減少して来たことである。優れた大学では文明の伝承を背負うことが大きくなる。勿論、その割合だけ海外文化との比較と導入も増すのが道理なのだが、優れた自らの文化の優位点をしっかりと把握してはなくてはならない。

日本大学医学部の林先生は、大学の基盤設立のためマイアミ大学に招待され、教授に仕事の紹介を命じられて説明したら、「それは米国の学者の研究の延長線上の話だろう。私が聞いているのは君のオリジナルな学問だ」と云われてショックを受けられたことが産経新聞の昨年末に掲載されていた。不幸にして、日本ではこんなことは理解されることすら難しい。海外論文を読み、見学に行つて問題を探す。得られた結果を海外の有力誌に発表する。海外で評価されることに心掛ける。集中的に研究費が出るのは海外で多く研究が行なわれる研究題目なのである。これでは全く創造的ではない。先ず日本の若き学徒諸君よ。自ら問題を見出し、自らの測定法で測定し、自らの結論を把握しよう。大学生活は、その第一歩でもあるのだ。私は私の大学のおわりになって、この点を明白にした文化を捉え、伝えたいと思つている。